

34 中田宿～古河宿
茨城県古河市
鴻巣～古河宿
(歩行距離 2113m 27分)
歩く地図でたどる日光街道
http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp

「此宿(古河)より野木宿迄之間老里塚塚々所・木立杉」「但、左右の塚共原町地内」(日光・奥州・甲州道中宿村大概帳)
日本橋から16里番目の一里塚。県立古河二高の校庭の一隅にある。一里塚は旅人に距離を知らせると共に休憩の場を提供したといひ、榎を植えて目印にしたとも云ひ、一里塚に植木を植えることについて大老の土井利勝(古河藩主)が將軍家光に「一里塚に何を植えたらよいか」と尋ねたところ「余の木」という返事を「えのき」と聞き違えて植えたという伝えがある。



⑥原町木戸
「原町より古河駅なり」(上野下野道の記)
日光街道古河城下の南の玄関口は、原町木戸といい、道路の両側に土塁が築かれ、その上に柵が組み、番所がおかれていた。
交差する小道は左が古街道、右を祭礼道といった。
元和の頃造られた日光街道が古道を二分した。祭礼道は古河の産土神雀神社の祭礼の時に旅人を通す道で、祭りに酔う町民と旅人とのトラブルを避けるため、旅人が城下にはいらないようにさせるための道とした。その案内のために町役人が羽織袴姿でここに立ったということです。なお、原町は寛永13年(1636)にできた町です。

茨城県古河市

⑤金堀谷
中の台と一里塚の間の低いところが金堀谷で、キリシタン90余名が処刑されたという場所です。



④中の台茶屋
このあたりが原町の中の台で、数軒の農家が茶店も兼ねて住んでいた。ここからは、左前方の松並木の樹間から、古河城の天守になぞらえた三階櫓が望まれ、古河の宿場はもう少しだと、旅人が元気を取り戻す景勝の地でした。

9 古河宿

日光街道の江戸・日本橋から数えて9番目の宿場である。
古河藩が管理していた古河三宿(中田・古河・野木)の一つである。天保14年(1843年)の『日光道中宿村大概帳』によれば、宿内の家数は1105軒で、本陣・脇本陣は1軒ずつ設けられ、旅籠が31軒(大5, 中6, 小20)、人口は3865人(男1992人, 女1873人)、駄賃・賃銭 荷物一駄・乗掛荷人共33文、軽尻馬一疋22文、人足一人16文であった。
將軍家による日光社参では、古河城は岩槻城・宇都宮城と並び、將軍の宿城とされておき、日光街道における主要な宿場の一つであった。
日光社参のときには、従者の数が膨大になるため、通常の宿泊施設だけでは足りず、城下の武家屋敷や町屋も割り当てられた。宿場は日光街道沿いの台町・一丁目・二丁目・横町(現在の本町・中央町・横山町の一部)にあったが、渡良瀬川等による河川交通も発達していたことから、古河の町は日光街道から河岸へ向けて折れ曲がった石町・江戸町等にも広がり、T字型に形成されていた。大名が宿泊する本陣は時期により異なるが、最もよく知られているのは二丁目にあったもので、現在、跡地には「本陣跡碑」がある。脇本陣も二丁目にあった。

③古河公方館址
「古河公方の館址にして、古城跡と称する小丘是れなり。丘は東面平地に連り、北方より西南に繞りて一帯の沼地あり。俗に之を御所沼と云ふ…初め足利義氏古河城に殺し子なし。遺臣某女を奉じて是に館す。豊臣秀吉、名族の断絶するを惜しみ、小弓義昭の孫国朝を某女に配し、似て家を継がしめ、且つ下野喜連川の地を給す。…」(日本名勝地誌)
古河総合公園は古河公方館(こがくぼうやかた)といわれる中世の城館跡へ行くことができる。鴻巣御所・鴻巣館・古河御所とも呼ばれる。近くには義氏の開基した徳源院跡、喜連川義親夫人の開基松月院跡(御所塚)などがある

②思案橋
この道を570m 7分行くと向堀川に架かる思案橋がある。義経の死を耳にし、橋の上で奥州行きを思案したといわれる。(古河市内下辺見)「(逸見村と大堤)両村の間に上水あり。其所にある土橋を静御前の思案橋といふ。静、義経の跡を慕ひ此所に来り、奥州へ行くかや止んやと思案せし所なりといひ伝ふ」『宝暦7年(1757)古河の弘法の香持水なりと奸民云つとひ、江戸其外近国より参詣群集し、水に浴して難病多く癒たりなど、かまはずしく伝へたるは此土橋の下の水にて、あと方もなき空言にてありしと也』(日光駅程見聞雑記) さらに利根川べりには静返し柳、静之椿碑などがある。

古河公方
古河地方は、鎌倉時代、源頼朝の家臣、下河辺氏がこの地を支配し、幕府の北の守りとして軍事上政治上にも重要な地点として栄えてきた。やがて室町幕府となり、足利尊氏の子基氏が関東管領(鎌倉公方)となり、関東を支配していたが將軍家との折り合いが悪くなり、四代持氏(もちうじ)が永享の乱(永享10年 1438~11年 1439)で將軍義政と争い、一度敗れたが許され、その子成氏(しげうじ)が再び管領となったものの、執事上杉憲忠と対立、追われて享徳4年(1455)に鎌倉から古河に居城し、古河公方と称した。結城・佐竹氏を始め関東の豪族の支持を受けたので、形勢は一変、古河は関東の政治文化の中心地となり、古河公方時代が5代128年にわたって続いた。歴代の公方達は、古河に鎌倉文化を移入した。その規模は鎌倉には及ばなかったが、古河の文化も大いに進み、文化人も数多く集まり、中でも医聖と呼ばれた医師田代三喜や当代の連歌師と言われた猪苗代兼載などは、この地に文化興隆をもたらした功勞者と言える。

熊沢蕃山
幕府は、儒学者を庇護し、学問を奨励したが、幕府が奨励したのは朱子学で、もう一方の陽明学は、幕府の政策とは相容れず、これを唱えていた熊沢蕃山は、政治家、経済学者、文学者、大教育家にもかかわらず、幕府の忌畏に触れ、禁固を命ぜられ、明石の松平信之侯に保護されました。その後信之が老中となり、古河城に移った時に蕃山も古河に移り、子の忠之が引継ぎ、その死を見とるや、儒礼をもって丁重に鮭延寺に葬ったと言われている。蕃山が古河に執居の間、蕃山の知識が洪水や農業に生かされ、数々の貢献を残している。墓は鮭延寺にある。

①鮭延寺(けいえんじ)
最上義俊の重臣鮭延越前守が古河の土井家に抱えられたのち、その旧臣たちが恩を謝して建立した寺で越前守の墓がある。

助郷の村々
各宿場町では、歩動交代や公用の人や物を運ぶために人馬を常備する必要があったが、これを助けるために近隣の村々が定助郷に指定された。古河宿の場合は、現古河市内の長谷・駒ヶ崎・牧野地・大堤・関戸・稲宮・下辺見・上辺見・大和田・磯辺・西牛ヶ谷・東牛ヶ谷・駒羽根・女沼・小堤・下大野・上大野、および、現加須市(旧北川辺町)内の伊賀袋・柳生・麦倉・向古河・柏戸・小野袋の23カ村である。

